

## 『蜜蜂と遠雷』

恩田 陸／著 幻冬舎（2016年）

かつての神童、栄伝<sup>えいでん あや</sup>亜夜。伝説的な故人の音楽家の弟子、風間<sup>かざまじん</sup>塵。平凡な家庭出身で、音楽に心残りがある社会人の高島<sup>たかしまあかし</sup>明石。たくさんのルーツを持ち実力も魅力もあるマサル・カルロス・レヴィ・アナトール。世界的に有名な芳ヶ江国際ピアノコンクールに参加した4人は様々な想いを胸に一次審査を迎えます。お互いに刺激しながら成長していき、音楽に対する複雑な思いやこれからの生き方を考えます。



## 『羊と鋼の森』

宮下 奈都／著 文藝春秋（2015年）

ピアノの音程や音色を美しく整える『調律師』。高校の体育館でその仕事ぶりを目にした外村は、初めて聞く美しい音に心を奪われました。そして卒業後、地元を離れて技術を学び、念願の調律師として働きはじめます。しかし、なかなか理想の音に調律することはできません。どうすれば上手になれるのか。どんな音を目指すべきか。悩みながらも外村はピアノとピアノを弾く人々と誠実に向き合い、成長していきます。



## 『花歌は、うたう』

小路 幸也／著 河出書房新社（2017年）

私は宮谷<sup>みやたにはな</sup>花歌、17才。しっかり者のおばあちゃんと公務員のお母さんと暮らしている。お父さんは元天才ミュージシャンで失踪して9年。ある日、幼なじみの睦美<sup>むつみ</sup>ちゃんが私の鼻歌を誉めて、ちゃんと曲にして歌詞を付けたいと勧めてくれた。映像作りが得意な同級生の凌<sup>りょういち</sup>も協力してくれる。曲のアレンジは睦美ちゃん。私が歌うとみんなが喜んでくれる。それが嬉しくて私は歌う。そして、本格的に動画作りが始まった。



## 『いとみち』

越谷 オサム／著 新潮社（2011年）

極度の人見知りと、友達にも通じない濃厚な津軽<sup>なま</sup>訛りを克服<sup>こくふく</sup>するためメイドカフェでアルバイトを始めた高校一年生の相馬いと。挨拶も「お、おがえりなさいませ、ごすずん様」と、まともに言えません。個性的な先輩の励ましと温かく見守ってくれるご主人様たちのおかげでなんとかお店に慣れてきたのに、閉店の大ピンチがおこります。小さい頃からばばと奏でてきた津軽三味線で、いととは人のため、そして自分のために動き出します。



## 『ようこそ！すばらしきオーケストラの世界へ』

近藤 憲一／著

ヤマハミュージックメディア（2010年）

オーケストラがどういうものか知っていますか。音楽を演奏していることは知っていても、難しそう、どこか堅苦しそう、といった印象が強く、本当のところどういうものなのか知らない人も多いと思います。この本では、指揮者やコンサートマスターといったオーケストラの「中の人」たちが、オーケストラについて語ります。知識だけでなく、音楽を仕事にしている人たちの音楽が好き、という気持ちがたっぷり詰まった一冊です。



## 『世界の国歌』

国歌研究会／編 ワニマガジン社（2006年）

世界95か国の国歌が日本語訳で紹介されている本書。人口や首都、公用語などの紹介はなく、淡々と歌詞のみが掲載されています。これは、政治的なニュアンスを排除するというねらいがあるそうです。歌詞の長さは長かったり短かったり、国によって様々ですが、どの国の国歌もその国の歴史や思想が強く伝わってきます。この本を読んでからオリンピックの優勝選手の国の国歌を聞くと、意味が分かって面白いかもしれません。

